宇久中 学校だより
城ケ岳
令和４年６月２日
第７号
佐世保市立宇久中学校
校長　萩山　栄二

●学校教育目標　「ふるさとを愛し、主体的に学習し、自らの判断で正しく行動できる生徒」

●教　育　理　念　「**磨く**」「**輝く**」「**光る**」「子どもは『**希望**』である」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＜ いのちを見つめる集会 ＞

■佐世保市では６月１日を「いのちを見つめる日」と定め、「心の教育の更なる充実」「コミュニケーション能力の向上」「子供の居場所づくり」「学校と家庭、関係機関等との連携・協働を図る」の４つを柱に「いのちを大切にする教育」の推進を図っています。本校でも１校時に「いのちを見つめる集会」を行い、校長講話とその振り返りをしました。

■講話では、はじめに詩人の堀江菜穂子さんことをもとにして考えました。堀江さんは脳性麻痺で体不自由で言葉も話すことができません。でも、ベッドに寝たきりの生活でありながら、筆談により数多くの詩を紡いできています。自分の言いたいことが言えない思いが岩のようになり、その岩を砕いて言葉にしたのが詩になっていきます。困難な毎日を過ごす一方、困難に立ち向かいたいという強い意志が苦しめます。詩は彼女自身の魂の解放であり、苦しい自分から逃れることができるものです。生きることはとても困難だけれども、不幸せとは違う。今まで生きてこられたのは一人の力ではなく誰かのおかげです。大事な家族や仲間に、今日のうちに「ありがとう」を伝えてほしい。彼女はこのような思いを持ちながら、「ありがとうのし」を書きました。

「ありがとうのし」
いつもいっぱい　ありがとう
なかなかいえないけれど
いつもこころにあふれている
いつもいえないありがとうが
いきばをうしなって　たまっている
ありがとうのかたまりが
めにみえないちからになって
あなたのちからになったらいいのにな

堀江さんの生き方は私たちに勇気を与えてくれます。そして生きることの大切さを教えてくれます。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

■次に『電池が切れるまで』という本に紹介されている、当時小学校４年生の宮越由貴奈さんの詩「命」を紹介しました。病気のため５年半もの間、入退院を繰り返し，何度も手術や苦しい治療を受け、11 歳という若さで亡くなっています。彼女の残したメッセージから「いのち」について考え、講話を終えました。

「命 」
命はとても大切だ
人間が生きるための電池みたいだ
でも電池はいつか切れる
命もいつかはなくなる
電池はすぐにとりかえられるけど
命はそう簡単にはとりかえられない
何年も何年も
月日がたってやっと
神様から与えられるものだ
命がないと人間は生きられない
でも
「命なんかいらない。」
と言って
命をむだにする人もいる
まだたくさん命をつかえるのに
そんな人を見ると悲しくなる
命は休むことなく働いているのに
だから 私は命が疲れたと言うまで
せいいっぱい生きよう

